



TITLE:

牛尾山ハイク・藤井天文臺參觀の記

AUTHOR(S):

京星人

CITATION:

京星人. 牛尾山ハイク・藤井天文臺參觀の記. 天界 1936, 17(187): 25-26

ISSUE DATE:

1936-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167355>

RIGHT:

牛尾山ハイク・藤井天文臺參觀の記

“明日朝9時、三條京津電車前參集”の電話が12日に傳へられて、初秋といふのに眞夏のやうに積亂雲の湧上る9月13日(日)朝、軽い服装に辨當持參で集まつたのは、高井博典、坂井 弘、吉澤覺文、吉澤弟、宇野良雄、それに紅一點の安東千恵子嬢といふ顔振れ、いづれも京星會の幹部で若い氣の合つた連中である。坂井宗匠の第1號川柳“いざ行かん色とりどりの衣にて”，京阪バスで京津國道を東に走り四宮から愈々颯爽とハイクする。空は青空、野



ハイキングの一行

は緑、小山の部落を抜けて美しい溪谷に入る。赤、黄、青とりどりの草花が路邊に咲き亂れ、安東嬢が學校仕込の植物學を披露し、藥專吉澤君は流石専門の深さを示す。路は水の美しい溪流に沿つたゆるやかな登り、到る處で坂井、宇野カメラ技師のスナツプが行なはれ牛尾觀音へ11時着。休憩後寺から北へ迂回して萩と尾花の亂れ咲く尾根路を辿り牛尾山々頂(546米)に到る。

北空には音羽、如意、比叡の山々が柔らかな線を描き、東は琵琶湖畔膳所石山の町々から遠く多景島が浮び、西は山科から東山を越へて京の街が霞む。花山天文臺のドームが銀白色に輝いてゐる。眺望佳絶、汗ばんだ肌を涼風が心持よくなぜる。降りは稍急坂で吉野弟君がよく迂る。安東嬢が恐そうだ。エヂを立てい、ステムボージェンで等云つてゐる内に高井君直滑降のつもりか谷までぶつ飛ばす。谷川のほとりで薪木に腰を下ろして辨當を開いたのが13時。

腹はふくれ、荷は軽く、歌を唱つて、谷を東へ石山へ進む。谷が明るくな

ると水の少ない用水池が三つ四つ続く。松林から田圃路を通り新田、森の部落に入る。静かな農家の庭に鳳仙花が眞赤に咲き、稻田を渡る風が高い唐黍を揺つて爽涼の秋の氣が動く。螢谷から瀬田川沿ひに石山寺に着く。石山の秋の月と稱し近江八景一の風景地である、月見亭で月の出の方位から球面天文學を論じ、眞面目な顔をして釣鐘をつく。未だ日が高いので寺を出て瀬田川にボートを漕ぎ出す。高井君オールで水をかいて吉澤弟君をぬれぬずみにする。三高のボートの練習、モータボート、スカールが爽快に走る。瀬田の唐橋まで上り歸りは坂井艇、宇野艇の競走、坂井君眞赤になつてがんばる。

18時石山から大津市馬場へ電車で走り藤井氏の御宅へ同ふ。藤井天文臺公開の夜(第2日曜)であり早速琵琶湖に臨んだ裏庭に通して戴く。倫敦製精密日時計や理科器械、標本を拜見し、三球儀の齒車の刻みの精巧さ。黄道と白道との傾斜の考慮されてゐる點等に感心する。薄明も終り、柳ヶ崎の琵琶湖ホテルの燈がチラチラする。8糎屈折エミールブツシュ機てのぞくと、3糎向ふの華やかな晚餐が目の前に展開する。16糎屈折機ドームへ案内して戴く。本年6月の枝幸の皆既日食、部分食の寫眞が新らしく掛けられてゐる。アイピース、ピント、微動装置の説明を一通り聞くと入れたもので臺の上に登り微動桿を握り勝手に木星を入れる。心臓の強い事だ。花山天文臺の山本先生と公文先生が御見へになり、一般參觀の方々が續々おいでになる。公文先生がドームの内で木星の解説をされる。ハイクの歸りであり餘り遅くならない内にと19時30分一同お先に失禮。夜の京津國道をドライブして15分で京都三條へ歸着。『明治』で温かいお茶をのんで19日の花山例會を約して別れる。

(京 星 人)

京阪神支部と京星會・大阪天文研究會

天文團體 第4回 合同ハイキング

1. 日時11月3日(明治節)

集合場所=會旗掲揚
をぐら

集合 { 阪神方面 大阪天満橋前 9時
京都方面 京阪三條前 9時

1. 方 面 京阪沿線巨椋池より宇治方面(晴雨不論)

——奮つて御參加あらん事を!!——